2011 copyright インド哲学研究会

クリキン王の予知夢譚と大乗仏説論
—『大乗荘厳経論』第Ｉ章第７偈の一考察—

藤　田　祥　道

要旨　『大乗荘厳経論』I.7 が大乗仏説論の第一の理由として挙げる、「初めに予言されていないから〔大乗は仏説である〕」の意味内容をスティラマティの複註（ＳＡＶＢｈ）を手がかりに考察する。すなわちＳＡＶＢｈに言及されるクリキン王の予知夢譚の内容を『中観心論註思択炎（ＴＪ）』、『スマーガダー・アヴァダーナ（ＳｕＡ）』などにもとづいて推定するとともに、この予知夢譚のモチーフが仏説論の文脈でどのような意味を持つかをＴＪ、『聖根本説一切有部沙彌頌註具光 (Prabhāvatī)』といった論書を依用しつつ明らかにする。

1

初期瑜伽行唯識学派の思想を種々の韻律形式を駆使して記述する『大乗荘厳経論頌』に説かれる著名な大乗仏説論[1] は、散文註（ＭＳＡＢｈ）サンスクリットテキストによれば、「大乗の成立についての章 (Mahāyānasiddhy-adhikāra)」と命名される２１

[1]大乗は仏説ではないという小乗部派からの論難に対して、大乗が仏説であり声聞乗の教えよりも勝れていると主張することはもちろん瑜伽行派に始まったものではない。それは既に『般若経』(e.g.T.7,pp.267c-268b,a-b) にも見られ、『大智度論』(T.25,p.506a) などの大乗論書にも論じられるところである（ｃｆ．宮本正尊 [1934]『大乗と小乗』八雲書店,pp.625-628. またナーガールジュナ (Nāgārjuna) 作『ラトナーヴァリー (Ratnāvalī, 宝行王正論)』4.80-93(M.Hahn ed.Bonn,1982,pp.122-128、瓜生津隆真訳『大乗仏典14』中央公論社,1974,pp.297-299) も見よ)。しかし大乗仏説論を体系的に論述したのは『大乗荘厳経論頌』が最初であろう。同じく大乗仏説論にふれ、『大乗荘厳経論頌』と著作の前後関係で問題となるのはヴァスバンドゥの『釋軌論 (Vyākhyāyukuti)』第四章とアサンガの『顕揚聖教論』「攝勝決択品」(T.31,p.581b) の二書であるが、このうち『釋軌論 (Vyākhyāyukuti)』が『大乗荘厳経論頌』よりも後のものであることについては、拙稿 [1996]「密意趣と大乗仏説論－別時意説の理解に向けて－」『曇鸞の世界－往生論註の基礎的研究－』永田文昌堂,p.48(註 36) を参照されたい。『顕揚聖教論』の大乗仏説に関する記述については、早島理氏の最近の御研究 [1997]「『顕揚聖教論』「攝勝決択品第十一」第 35 偈について」『長崎大学教育学部社会学論叢』53,pp.9-12 にＭＳＡ,I.7 とそのＢｈの和訳を含む詳細な比較考察がなされ、『顕揚聖教論』のものがＭＳＡに依拠し敷衍したものであると結論されている。

2011 copyright インド哲学研究会

偈からなる第Ⅰ章のうちの、第7-21偈に論述される[2]。このことは、大乗が仏説であることを論証するということが大乗の成立にかかわる重要な事柄であることを示している[3]ものと考えられる。

このように同論書にとって重要な意味を持つ大乗仏説論は、まず第7偈で大乗が仏説である理由を七項目(あるいは数え方によっては八項目)挙げることから始まる。同偈頌の概要については、これまでにもたびたび紹介されていることから[4]一応の理解を得ることができるが、しかしなお十分に理解し得ない点も残されている。なかでも、おそらく最も理解しがたいのは、七種の理由の第一に「ādāv avyākaraṇāt 初めに予言されていないから〔大乗は仏説である〕」という理由が挙げられていることであろう。その内容は散文註(ＭＳＡＢｈ)によって次のように説明される[5]。

---

[2]『大乗荘厳経論』の章構成を論じるにあたって必ず言及されることであるが、第Ⅰ章は漢訳(波羅頗蜜多羅訳)および散文註(ＭＳＡＢｈ)チベット訳によれば第1-6偈と第7-21偈との2章に分かれ、漢訳ではそれぞれ「縁起品」と「成宗品」、散文註チベット訳では“Dang po'i skabs,Ādy-adhikāra”と“Theg pa chen po sgrub pa'i skabs,Mahāyānasiddhy-adhikāra”と称される。『大乗荘厳経論』の章分けについては章数の問題とも絡まるので簡単には論じられないが、内容から見れば同論書冒頭の21偈は漢訳や散文註チベット訳のように2章に分かれるべきである。すなわち、「大乗の成立についての章」とは第7-21偈の大乗仏説論を論述する部分のみを指すと見なすべきである。なおチベット訳の“Ādy-adhikāra”という章題についてであるが、これはサンスクリット本でいう第Ｘ章の冒頭に出る章題を示すウッダーナ、

> ādiḥ siddhiḥ śaraṇaṁ gotraṁ citte tathaiva cotpādaḥ /
> svaparārthas tatvārthaḥ prabhāvaparipākabodhiś ca //(ＭＳＡ,p.50.2-3)
> / sdom ni dang po sgrub skyabs rigs // de bzhin du ni sems bskyed dang /
> / rang bzhin don dang de nyid don // mthu dang yongs smin byang chub po /
> (D.Phi162a4-5;P.Phi173b6-7)

のa句にある“ādiḥ siddhiḥ”の部分を参照して想定した。これを「最初〔の章〕(ādi)と成立〔の章〕(siddhi)」と読むならば漢訳や散文註チベット訳のように2つの章があることになり、またこれを「最初なる成立〔の章〕」(同格)と読むことが許されるならばサンスクリット本の第Ⅰ章に関する章分けも支持されるであろう。

[3]Mahāyānasiddhy-adhikāra という章題について、「大乗が仏説であることを証明する章」(小谷信千代[1984]『大乗荘厳経論の研究』文栄堂,p.86)あるいは「大乗〔が仏説であること〕を成立する章」(袴谷憲昭・荒井裕明[1993]新国訳『大乗荘厳経論』大蔵出版,p.404下段)という理解が見られるが、素直に「大乗の成立についての章、大乗の成立〔を論じる〕章」と理解すべきではないだろうか。それは、大乗が仏説であることを論証することがすなわち大乗という教えの成立ないし大乗学派としての瑜伽行派の成立という根本問題を論じるものである、ということである。漢訳の「成宗品」という章題もそういう意味であろう。

[4]野澤靜證[1931]「印度に於ける大乗仏説非仏説論(大乗荘厳経論成立大乗品の研究)」『大谷学報』22-3、早島理[1973]「菩薩道の哲学」『南都佛教』30,pp.15-16、do.[1997]pp.8-12、小谷信千代[1984]p.86ff.、高崎直道[1985]「総説　大乗仏教の＜周辺＞－補論大乗非仏説論の資料」『講座・大乗仏教10』春秋社,pp.20-25.

[5]この部分は読みに関していささか問題を含んでいるので、まず梵藏漢を示す。

> **ādāv avyākaraṇāt** yady etat saddharmāntarāyikaṁ paścāt kenāpy utpāditaṁ / kasmād ādau bhagavatā na vyākṛtam anāgatabhayavat / (ＭＳＡ p.3.7-8).
> **/ sngar lung ma bstan** zhes bya ba ni / gal te 'di dam pa'i chos kyi bar chad byed par phyis 'ga' zhig gis phyung pa yin na / ci'i phyir ma 'ongs pa'i 'jigs pa bzhin du snga nas lung ma bstan /(D.Phi 130b4-5;P.Phi 137a6-7)
> 第一不記者。先法已盡後佛正出。若此大乗非是正法。何故世尊不記耶。譬如未来有異世尊即記。此不記故知是佛説。(T31,p.591a)

2011 copyright インド哲学研究会

> 初めに予言されていないから〔大乗は仏説である〕とは。もしこれ(大乗)が正法を害するものとして〔仏滅〕後に誰かによって創り出されたものであるならば、なぜ世尊は、未来の恐れのように、初めに予言されておられないのか。

未来に大乗という仏説にあらざる危険思想が出現するなどということは世尊によって予言されていないから大乗は仏説だというのである。しかし一体なぜこれが大乗仏説論の第一の論拠たりうるのであろうか。少なくとも今日の我々にとってはおよそ説得力のある大乗仏説論と言えるものではあるまい。

予想されることは、この理由が大乗仏説論に関して一般的・普遍的な主張をなすも

またＭＳＡ,I.k.7 とその散文註は『成唯識論』(新導本巻 3,pp.23-24; T.31,p.14c-15a) に全文が引用されているので、当該箇所の玄奘訳が得られる。その読み下しとともに以下に示す。

> 一先不記故。若大乗經佛滅度後有餘爲壞正法故説。何故世尊非如當起諸可怖事先預記別。(一には先に記せざるが故にとは。若し大乗經は佛滅度して後に餘有りて正法を壞さんが爲の故に説くとせば、何故に世尊の當に諸の可怖の事起らんとの如く、先に預め記別したまわざる。)

波羅頗蜜多羅訳には理解しがたい点があるが、その他は一致した理解を得ることが出来るであろう。ただし上記サンスクリット文については若干の説明を要する。まず、“saddharmāntarāyikaṁ”の部分はレヴィ刊本の“saddharmāntarāyi”を舟橋尚哉氏 ([1985]『ネパール写本対照による大乗荘厳経論の研究』文栄堂,p.7.12,p.14(note15)) に従って訂正している。早島 [1997],p.17(note31) はこの訂正を採用せずレヴィ刊本のままで読むことを提案されるが、舟橋氏御指摘のようにネパール諸写本 (龍大 AB,Ns,Nc,Na,Nb,Nx) のいずれにもある“(saddharmāntarāyi)kas”の文字はやはり無視されるべきではないだろう。“-kas”が“-kam(=-kaṁ)”の誤写ということは大いにありうる。チベット訳あるいは玄奘訳も舟橋氏の訂正を指示するのではないだろうか。

他にもう一ヶ所、“anāgatabhayavat”については長尾雅人博士によって“anāgatabha(ṅ)gavat(?)”という訂正案が提出されており (Index to the Mahāyānasūtrālaṁkāra,pt.1, 日本学術振興会,1958,p.xii)、舟橋、早島両氏ともこの訂正を採用されている。しかし舟橋氏も指摘されるようにネパール諸写本は概ねレヴィ刊本のままの読みを支持するし (ただ Nx 本のみは“anāgatabhagavat”とあるが、これは不注意による誤写であろう)、チベット訳“'jigs pa”も同様である。さらに玄奘訳が“如當起諸可怖事”であることからすれば、レヴィ刊本の“anāgatabhayavat”を訂正することは大いに疑問である。後に検討するように、意味の上からしても、「未来の恐れのように」と理解して何ら不都合はない。ただ問題として残るのは波羅頗蜜多羅訳の「譬如未来有異世尊即記」であり、長尾 index の“anāgatabha(ṅ)gavat(?)”という訂正案もこの漢訳「有異世尊」を考慮したものと推測される。たしかにここには-bhaya-に相当する訳語がみられず、代わって「有異」の語が見られることは、-bhaṅga-や、あるいはむしろ-bheda-といった異読の可能性を示唆するかもしれない。

なお、『成唯識論述記』巻 4 本 (T.43,p.352b-c) は『成唯識論』の「(當起) 諸可怖事」を注釈して、「餘 (sic.) 可怖事。謂『正法滅經』説。瞻波羅國國城邑。有諸比丘滅我正法。可怖等事。又分十八部等。」と述べる。つまり『大乗荘厳経論』のいう「未来の恐れ」とは、比丘による正法の破壊あるいは仏教教団の十八部派への分裂のことであるというのである。この『述記』の注釈は、以下に触れるＳＡＶＢｈのクリキン王の予知夢譚に言及する注釈とは異なる伝承にもとづくものでらしく窺われる。ただし『述記』においてもＳＡＶＢｈにおいても、「未来の恐れ」とは出家教団の未来についての恐れを指すものと理解している点で、両注釈は一致する。

ちなみに、ＳＡＶＢｈや『成唯識論述記』を参照していないＳ．レヴィは、『大乗荘厳経論』仏訳の脚注で、この「未来の恐れ anāgatabhaya」に関連して、パーリにのみ伝わる『増支部』V.77-80 や、漢訳に伝わるいくつかの経典 (Nanjo No.468=T.No.395『佛説當來變經』; Nanjo No.470=T.No.396『佛説法滅盡經』; Nanjo No.766=T.No.1481『佛説五恐怖世經』) を指摘している。ただしこれらは黙示をテーマとする経典の一例として挙げたもので、ここでいう「未来の恐れ」の内容やそれを説く典籍についてはなんの言及もされていない (cf. ＭＳＡ Tome II,pp.6-7)。

2011 copyright インド哲学研究会

のではなく、ある特定の敵対者を想定したものであろうということである。つまりこの第一の理由は、特定の敵対者による大乗非仏説論に対する答弁として提出されたものであり、したがってその答弁は第三者には意味が通じなくともよく、当面は敵対者と瑜伽行派との間で議論が成立すればよいのである。

その「予言されていないから〔大乗は仏説である〕」という答弁の意図を知る鍵となるのがＭＳＡＢｈの「anāgatabhayavat 未来の恐れのように」という語句である。この語句によって、それまでに 世尊による「未来の恐れ」について何らかの予言があり、それをふまえて「予言されていないから大乗は仏説である」という答弁をしていることが知られるであろう。

周知のとおり、『大乗荘厳経論』の内容を理解するには、アスヴァバーヴァ(Asvabhāva, 無性) 著述の広註 (ＭＳＡＴ) とスティラマティ(Sthiramati, 安慧) の著述とされる複註（ＳＡＶＢｈ）との二本の注釈書が不可欠であるが、この部分については後者のみに注釈がある[6]。

> もし声聞達が「大乗というこの法は仏が涅槃なされた後、正法を害し滅するために『般若 (経)』等の「〔すべては〕無い」という法を創作設定して、『これは仏説である』と仮に設定したものであるから、大乗は仏語ではない」と言うならば、対する答弁として**初めに予言されていないから**という。〔すなわち、〕もし仏陀の教法を衰退させようとして聖教 (pravacana) を乱す『般若 (経)』等を誰かが創作し〔それを〕仏説であると仮に説いたとすれば、〔如来によって〕聖教混乱の原因が、クリキン王が夢の中で七種の夢を見たことを通して予言されているように、入涅槃される前に「正法が衰退し滅びるとき、このような『般若 (経)』等の法空を説く〔大乗経典〕が出現して、それが仏説であると言われるが、それは仏説ではなく聖教を滅ぼすものである」と初めに予言されているのが合理である。しかしそのような予言はされていないから、大乗は仏説である。

『大乗荘厳経論頌』の「初めに予言されていないから」という語句が小乗部派による大乗非仏説論に対する答弁として用意されたものであることは、ＳＡＶＢｈにおいて明快である。そして『大乗荘厳経論頌』が「初めに予言されていないから〔大乗は仏説である〕」という答弁をなす前提となった世尊による「未来の恐れについての予言」とは、クリキン王の夢にもとづいて世尊が未来について予言したもの (以後これをクリキン王の予知夢譚と称する) であることがＳＡＶＢｈによって明らかにされる。この場合、このクリキン王が見た夢にもとづいて如来が未来の聖教の混乱を予言する

[6] ＳＡＶＢｈ,D.Mi17b2-6;P.Mi18b4-19a1; 拙稿 [1993] 「『大乗荘厳経論』の大乗仏説論に対する無性釈・安慧釈チベット訳校訂テクスト」『龍谷大学仏教学研究室年報』6,pp.61.26-62,6.

2011 copyright インド哲学研究会

という伝説は、大乗非仏説論者たる小乗部派においても大乗仏説論者たる瑜伽行派においても共に承認されるものでなければならないのは言うまでもない。そうでなければ瑜伽行派の主張は小乗部派に対して効力を持たないからである。瑜伽行派は小乗部派においても認められる仏滅後の仏教の未来に関するある伝説を利用して、大乗非仏説の非難に答えようとしているのである。とはいえ、ＳＡＶＢｈからは肝心のクリキン王の予知夢譚の内容が全くわからず、これが明らかとならない限り、瑜伽行派の「初めに予言されていないから」という大乗仏説論の真意を窺い知ることは出来ない。

2

『大乗荘厳経論』の大乗仏説論について最初の本格的な研究を 1931 年に発表された野澤静證氏は、既にその研究にあたってＳＡＶＢｈを利用するだけでなく、スティラマティと同時代の中観派の論師バーヴァヴィヴェーカ (Bhāvaviveka, 清弁) の著作『中観心論疏思択炎 (ＴＪ)』の第四章にも大乗仏説論が展開され、両論書に大乗仏説論に関してパラレルな言及が見られることを明らかにしておられる。その一例となるのがこのクリキン王の予知夢譚である[7]。以下にＴＪの当該箇所を試訳してみよう[8]。

[7]野澤 [1931]p.55(n.5).

[8]TJ,D.Dza 188a5-b5;P.Dza 205a7-206a1:

/ gal te bcom ldan 'das 'od srungs la rgyal po kri kīs rmi lam gsol pa na / bka' stsal pa / skye dgu'i tshe lo brgya thub pa na de bzhin gshegs pa shā kya thub pa zhes bya ba 'byung ba de'i bstan pa la sde pa bco brgyad du gyes par 'gyur ro //(1) zhes bstan pa'i dbye bar theg pa chen po ma bstan to zhe na /

(i) theg pa chen po ni nges par zab cing rgya che [P.205b] ba la mos pa'i sems can gyi bsam pa dang lhag pa'i bsam pa'i dbang du byas nas sde pa bco brgyad la thun mong du bstan pa yin te / gtsug lag gi gsung rab rnams las skye ba dang / na tshod dang / mdog dang / yul dang / dus tha dad pa med par bstan pa bzhin no /

(ii) / yang na sangs rgyas thams cad kyi bstan pa la nyan thos kyi theg pa dang / rang sangs rgyas kyi [D.188b] theg pa dang / theg pa chen po'i dbye ba ni yod pa kho na yin la / bstan pa tha dad kyi dbye ba ni shā kya thub pa kho na la yod kyi gzhan la ni yod pa ma yin zhing / log par dad sel la sogs pa'i de bzhin gshegs pa rnams kyis kyang theg pa tha dad du dbye ba mdzad pa ni yod pa yin pas (2) 'od srungs kyis ma bstan pa yin no // de'i phyir na theg pa chen po ni sangs rgyas kyi gsung ma yin pa ma yin no /

(iii) / bcom ldan 'das yongs su mya ngan las 'das nas ring po ma lon par nyan thos la sogs pa rang rang(3) la gsungs pa la yongs su zhen cing / de ched du byed pa'i sdud pa pos(4) ji ltar dbang(5) ba bzhin du yang dag par bsdus pa na theg pa chen po'i gsung rab ni snod du gyur pa su yang med pas gang gis kyang ma bsdus te / bde bar gshegs pa la mngon par dga' ba'i klu la sogs pa rnams kyis yongs su bsdus nas klu'i 'jig rten dang lha (6) la sogs par bzhugs su gsol ba las de'i snod du gyur bas sangs rgyas kyis lung bstan pa 'phags pa klu sgrub kyis de dag nas bsdus nas mi'i 'jig rten du rab tu rgyas par mdzad pa yin no /

(iv) / rnam pa thams cad mkhyen pa nyid thob par 'gyur ba dang / (7) rjes su mthun pa'i theg pa chen po'i bstan pa ni bdud kyi sbyod yul ma yin pas de'i phyir theg pa chen po ring du spong bar byed ching sun 'byin pa ni rigs pa ma yin no // blos dpyod par nus pa yod na rigs pa dang rigs pas de brtag par [P.206a] gyis shig /

2011 copyright インド哲学研究会

世尊カーシャパ (Kāśyapa, 迦葉) にクリキン王が夢を告げた時、〔カーシャパ如来は〕おっしゃられた。「人の寿命が百年の時、シャーキャムニ (Śākyamuni, 釈迦牟尼) という如来が出られ、彼の教説において部派が十八に分裂するであろう」と。〔こう〕説かれた箇所に大乗は説かれていないではないか〔、したがって大乗は仏説ではない〕と、もし〔君たち大乗非仏説論者が言う〕ならば、〔このように答えよう〕。

(i) 大乗は、確かに、甚深で広大なる〔教え〕を信解する有情の意欲 (āśaya) やすぐれた意欲 (adhyāśaya) を念頭に置いて (adhikṛtya) 十八部派に共通して説かれている。聖典 (ārśa) の諸教説 (pravacana) の中に「生まれや年齢や〔皮膚の〕色や土地や時の差別はない」と説かれているごとくである。

(ii) あるいはまた、あらゆる仏の教説に声聞乗と独覚乗と大乗の区別は必ずあるけれども、〔三乗の〕教説の別異を区別することはシャーキャムニにのみあって他〔の諸仏〕にあるわけではない。クラクッチャンダ等の如来たちによっても乗の別異を区別なされたことがあるから、カーシャパは説かれなかったのである。したがって大乗は仏語でないことはない。

(iii) 世尊が完全な涅槃に入られてから久しからずして声聞等は各自に説かれたものに執著し、そのために、結集者が権勢に任せて結集した時、大乗の聖教 (pravacana) は〔大乗の法の〕器たる者 (bhājanabhūta) が誰もいなかったので誰によっても結集されなかった。〔そこで〕善逝を愛慕する龍 (nāga) 等たちによって集められて龍の世界や天等に保管された〔。それ〕から、その〔大乗の法の〕器たる者として仏によって予言された聖ナーガールジュナ (Nāgārjuna, 龍樹) がそれら〔龍の世界や天等〕から集めて人間界に弘められたのである。

(iv) 一切種智性 (sarvākārajñatā) を得ることに合致する大乗の教えは悪魔の対象領域 (māraviṣaya) ではないから、それゆえに大乗を拒絶し非難することは合理ではない。智慧 (buddhi) をもって吟味する能力があるならば、正理 (nyāya) と推理 (yukti?) をもってそれを思慮せよ。もう傍論は十分だ。

カーシャパ如来はシャーキャムニ如来以前の、人間の寿命が二万歳の時に世に出た

---

(8) shin tu spros pas chog go /

(1)D.*om.*//. (2)P.*inserts* yang *after* pas. (3)D.*om.*rang. (4)P.po yis *instead of* pos. (5)P.dpang. (6)P.*om.* dang lha. (7)P.*om.*/. (8)P.*om.*/.

試訳に際しては野澤 [1973]「清弁の声聞批判—インドにおける大乗仏説論—」『函館大谷女子短期大学紀要』5,p.220 を参照した。

2011 copyright インド哲学研究会

とされる過去仏であり、このときに世を統治していたのがクリキン王 (Kṛkin) である[9]。TJによって窺われるクリキン王の予知夢譚とは－遙か昔カーシャパ如来の在世時、クリキン王がある夢を見る。王がその夢をカーシャパ如来に告げると、如来はそれにもとづいて未来のシャーキャムニ如来滅後の部派分裂について予言する－というものである。

シャーキャムニ教団の分裂を予言するこの予知夢譚がＳＡＶＢｈのいう「聖教混乱の原因」を予言する予知夢譚と同一のものであるかどうかは後に検討するとして、ＳＡＶＢｈとＴＪを比較して大きく異なる点は、前者ではクリキン王の予知夢譚が大乗仏説論を擁護する論拠であったのに対して、後者ではそれが大乗非仏説論の論拠とされていることである。バーヴァヴィヴェーカは、クリキン王の予知夢譚に大乗のことが説かれていないから大乗は仏説ではないという小乗部派の論難に答える形で大乗仏説論を展開するのである。彼は論難に対して四つの答弁を用意している。まず (i) の答弁は、部派の伝持する典籍の中にも大乗的な教えは説かれているというものである。(ii) は意味がとりがたいが、カーシャパ如来が大乗について言及していないのは大乗を含む三乗の区別を認めていないからではなく、ただシャーキャムニ如来のように大乗という教説 (大乗経典) を特別に区別することがないからである、というものであろう。(iii) は、大乗経典は根本結集のときには結集されずナーガールジュナが世に出るまで隠没していたというよく知られたものである。(iv) は聖典の権威・正統性は伝説などに依ってではなく、正理によって決すべきであるというものであり、特にこの答弁においてバーヴァヴィヴェーカの個性が見られるであろう。

ともあれ、クリキン王の予知夢譚が小乗部派によって仏説論に関する一つの権威と見なされていたらしいことがＴＪから窺われる。

3

さて、クリキン王の予知夢譚については、ヴィンテルニッツ (M.Winternitz) の『インド文学史』(1920年) に言及があり、『スマーガダー・アヴァダーナ (Sumāgadhāvadāna, ＳｕＡ)』あるいは『倶舎論』世間品に対するヤショーミトラ (Yaśomitra, 称友) 註 (ＡＫＶｙ) に十種の夢からなる予知夢譚が出てくることが指摘される[10]。ヴィンテルニッツは著書の中でＳｕＡに関する研究として1989年発表の常磐井堯猷博士による学位論文を紹介しているが、常磐井博士によるＳｕＡの研究は1918年に原典の公刊という形で世に公にされた。ＳｕＡの研究はその後博士の研究を引き継いだ岩本裕

[9] クリキン王 (Kṛkin, Kikī) については、赤沼智善編『印度佛教固有名詞辞典』法蔵館, pp.291-293(q.v. Kassapa) を参照。

[10] Moriz Winternitz,Geschichte der Indishen Literatur Band II,Liepzeg,1920,S.229. Eng.trans.by V.Srinivasa Sarma,A History of Indian Literature Vol.II,p.281(Revised Edition).

2011 copyright インド哲学研究会

博士によって進められ、1968年および1979年に詳細な研究が発表されると、ＳｕＡおよびクリキン王の予知夢譚についてほぼ十全な知見が世にもたらされることになった[11]。本稿は多くの部分を岩本博士のご研究に依拠するものであり、わずかにクリキン王の予知夢譚が仏説論と関連する点について補完を試みるものである。

ここでクリキン王の十夢からなる予知夢譚を伝える資料を整理しておこう。

1. 『スマーガダー・アヴァダーナ(ＳｕＡ)』:梵藏漢の資料を備える。

   - サンスクリット原典については岩本 [1968]SS.7-82 に六本の写本からの、do.[1979] 附録Ｉには八本の写本からの校訂が掲載され、後者 (pp.10-54) に和訳がある。ただし諸写本間の異読についての注記は前者のみにある。
   - チベット訳は Dharmaśrībhadra および Tshul khrims yon tan の訳による "Magadhā bzang mo'i rtogs pa brjod pa,Sumagadhāvadāna(sic.) "(D.Tohoku No.346;P.Otani No.1015) として入蔵されている。岩本 [1968]SS.111-130,do.[1979] 附録 III にラサ版を底本とした校訂が掲載され、後者 pp.77-95 にチベット訳からの和訳がある[12]。
   - スマーガダー伝説に関連する漢訳仏典としては五種 (T.Nos.125,128-130, 他1本) が挙げられるが、クリキン王の十夢からなる予知夢譚を含むものは大正 No.130 宋代施護訳『佛説給孤独長者女得度因縁經』(T.2,p.845c-p.854a) のみである。岩本 [1979]pp.98-130 にその国訳がある。

2. 『倶舎論』世間品およびその諸注釈:

   - 『倶舎論』(ＡＫＢｈ,p.124.5) に対する玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』(T.29,p.45c) および真諦訳『阿毘達磨倶舎釈論』(T.29,p.202c) は十夢の項目のみを列挙する。しかし玄奘の学系を継ぐ普光の『倶舎論記』(T.No.1821) および法宝の『倶舎論疏』(T.No.1822) は十夢の内容を詳しく説いている。岩本 [1979]pp.206-208 に法宝『倶舎論疏』の国訳が紹介される。
   - インド撰述の『倶舎論』に対する諸注釈書、すなわち、ヤショーミトラ註 (ＡＫＶｙ. p.277.35-278.31)、スティラマティ註 (ＡＫＴＡ, P.Tho27a6-28a1)、プールナヴァルダナ (Pūrṇavardhana, 満増) 註 (ＡＫＬＡ, P.Ju327b4-328b3)、シャマタデーヴァ (Śamathadeva, 寂天) 註 (ＡＫＵｐ, P.Tu146a6-147b5) にクリキン王の十夢からなる予知夢譚が引用される。このうち唯一

[11] 以上のスマーガダー・アヴァダーナに関する研究史については、岩本裕 [1979]『仏教説話研究第５巻』開明書院,pp.1-4 を参照。

[12] なおこの『スマーガダー・アヴァダーナ』におけるクリキン王の予知夢譚が、チベット人 Gos lo tsā ba gzhon nu dpal(1392-1481) 著述の仏教史『テプテル・グンポー (Deb ther sngon po)』に引用されていることが、その英訳 (G.N.Roerich,The Blue Annals,Part 1,Calcutta,pp.26-27) にもとづいて指摘されている。岩本裕 [1968]Sumāgadhāvadāna,Kyoto,S.208、do.[1979]p.212.

2011 copyright インド哲学研究会

サンスクリット原典の残るヤショーミトラ註は、クリキン王の十夢は「律の中に誦される (vinaye paṭhyante)」というが、どの律を指すのかは依然として不明である[13]。シャマタデーヴァのＡＫＵｐにクリキン王の予知夢譚が引用されることは本庄良文氏が明らかにされたことであり、同氏による和訳も発表されている[14]。ＡＫＵｐは『倶舎論』が言及するクリキン王の十夢からなる予知夢譚を『カーンチャナマーラー・アヴァダーナ (gSer phreng can gyi rtogs pa brjod pa,Kāñcanamālā-avadāna』なる典籍の中に誦されているものであるとする。後述するようにカーンチャナマーラーおよびスマーガダーはともに女性の名前であり、前者は後者の前世であることから、ＳｕＡと『カーチャナマーラー・アヴァダーナ』との親近性が窺われる。

3. クシェーメーンドラ (Kṣemendra, １１世紀) の『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター (Bodhisattva-avadāna-kalpalatā)』第９３章:

- これはＳｕＡの内容を韻文によって伝えるものであり、二本の写本から校訂されたサンスクリットテキストが岩本 [1968]SS.90-100,do.[1979] 附録 II に掲載され、さらに後者 pp.55-68 にその和訳がある。

これらの諸本諸訳に見られるクリキン王の十夢からなる予知夢譚には種々の異読などが見られるが、ここでは資料として最も整ったＳｕＡを中心に検討する。ＳｕＡはその書名が示すように、スマーガダーという在俗の女性仏教信者にまつわるアヴァダーナである。彼女はシュラーヴァスティー (Śrāvastī, 舎衛国) に住む有名な長者アナータピンダダ (Anāthapiṇḍada, 給孤独) の娘である。アヴァダーナの大半は異教徒の家に嫁いだスマーガダーが家族その他を仏教徒に転向させるという「異教徒教化物語」に費やされるが、終わりになってこのスマーガダーの偉業は前世の因縁があってのことであるとして、クリキン王の予知夢譚を挿入する。すなわち、遙か昔、人の寿命が二万歳の時、ヴァーナーラシーにカーシャパという如来がおられ、クリキンという王が世を統治していた。王にはカーンチャナマーラーという名の愛娘がいたが、これこそスマーガダーの前世である。ある時カーンチャナマーラーの父王クリキンは十の夢を見る。その十夢が悪い予兆ではないかと訝ったクリキンは娘の勧めに従ってカーシャパ如来のもとに行き、如来に夢の真相を問うのである。以下、カーシャパ如来が答弁する部分をサンスクリット校訂本から和訳してみよう[15]。

---

[13]ヤショーミトラ註の当該部分和訳については、岩本 [1979]pp.208-210、山口益・舟橋一哉 [1955]『倶舎論の原典解明　世間品』法蔵館,pp.117-119 を参照。

[14]本庄良文 [1984]『倶舎論所依阿含全表』私家版,pp.34-35(No.25). 和訳は、同 [1991]「シャマタデーヴァの伝へる阿含資料—世間品 (4)[25]-[49]—」『神戸女子大学教育諸学研究論文集』5,pp.89-90.

[15]岩本 [1968]SS.41.2-42.20 あるいは do[1979] 附録 I, § 258:

bhagavān āha: mā bhaiṣīs tvaṁ, mahārāja, na tavetonidānaṁ rājyāc cyutir bhaviṣyatīti jīvitasya

2011 copyright インド哲学研究会

世尊は言われた。「大王よ、恐れることはありません。その因縁であなたが王位から転落したり命に支障があることはありません。

(1) 大王よ、あなたが“一頭の象が窓から出てしっぽがひっかかった”夢を見られたのは、未来の世、人々の寿命が百年の時代に、シャーキャムニという名の如来・阿羅漢・正等覚者が出られるであろう。彼は完全にブッダとしてなすべき事をなしおわって、薪が燃え尽きることによって火が〔消失する〕ように、無余依涅槃界において完全な涅槃に入られるであろう。彼が完全な涅槃に入られた後、バラモンや長者たちは〔もはや〕信仰心がなくなるであろう。彼らは泣きながら、顔に涙する親族たちを捨てて出家し〔つつも〕、僧院において家庭の思いをおこすであろう、という、このことの予兆なのです。

(2) またあなたが、“渇いた者の後から井戸が追いかける”夢を見られたのは、その同じ〔シャーキャムニ如来〕の声聞たちが信仰心なき長者たちに法を説くであろうが、かれら渇仰ある者たちだけが進むであろう、という、このことの予兆なのです[16]。

---

cāntarāyaḥ. (1) yat tvaṁ, mahārāja, svapnam adrākṣīr, vātāyanena hastī nirgacchan puccho lagna iti, bhaviṣyaty anāgate 'dhvani varṣaśatāyuṣi prajāyāṁ śākyamunir nāma tathāgato 'rhan samyaksaṁbuddhaḥ, sa sakalaṁ buddhakāryaṁ kṛtvendhanakṣayād ivāgnir anupadhiśese nirvāṇadhātau parinirvāsyatīti. tasya parinirvṛtasya paścime kāle aśrāddhā brāhmaṇagṛhapatayas, te rudanto 'śrumukhān bandhūn utsṛjya pravrajya vihāreṣu gṛhasaṁjñām utpādayiṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (2) yat tvaṁ punaḥ svapnam adrākṣīs, tṛṣitasya pṛṣṭhataḥ kūpo dhāvati, tasyaiva śrāvakā dharmaṁ deśayiṣyanty aśraddhānāṁ† gṛhapatīnāṁ, te satṛṣṇā eva prakramiṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (3) yat tvaṁ svapnam adrākṣīr, muktāprasthena śaktuprasthaṁ krīyamānam iti, tasyaiva śrāvakāḥ śaktuprasthasya hetor indriyabalabodhyaṅgāni saṁprakāśayiṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (4) yat tvaṁ svapnam adrākṣīś, candanaṁ kāṣṭhārgheṇa samīkriyamāṇaṁ, tasyaiva śrāvakās taṁ tīrthikavākyam anugṛhya saddharmeṇa samīkariṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (5) yat tvaṁ svapnam adrākṣīr, gandhahastī kalabhair vitrāsyata iti, tasyaiva śrāvakā asaṁyatās te śīlavanto bhikṣūn niṣkāśayaṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (6) yat tvaṁ svapnam adrākṣīr, ārāmāṁ puṣpaphalasaṁpannaṁ adattādāyibhir apahriyamāṇaṁ, tasyaiva śrāvakā āryasaṅghasya pratipāditam ārāmaṁ saṅgham ālaṁbīkṛtya kecid abhāvitakāyā abhāvitacittā abhāvitaprajñāḥ saṅghād ācchidya puṣpaphalaṁ svajanebhyo dāsyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (7) yat tvaṁ svapnam adrākṣīr, aśucimrakṣito markaṭaḥ parān upalimpyatīti, tasyaiva śrāvakā abhāvitakāyā abhāvitacittā abhāvitaprajñā ātmanāpattim āpannāḥ śrāddhānām api bhikṣūṇām āpattiṁ vyavasthāpayiṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (8) yat tvaṁ svapnam adrākṣīr, markaṭasya rājyābhiṣekaḥ, tasmin samaye vikalendriyā api rājāno bhaviṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. (9) yat tvaṁ svapnam adrākṣīḥ, paṭo 'ṣṭādaśabhir janair ākṛṣyate na ca śīryata iti, tasya parinirvṛtasya śāsanam aṣṭādaśabhedabhinnaṁ bhaviṣyati, na ca śakyati vimuktipaṭaṁ pāṭayituṁ, tasyaitat pūrvanimittam. (10) yat tvaṁ svapnam adrākṣīr, mahājanakāyaś caikatra saṁnipatya kalahabhaṇḍena vivādavigrahenātināmayanti, tasya śāsane asaṁyatā bhikṣavaḥ kalahabhaṇḍanavigrahavivādenāntardhāpayiṣyanti, tasyaitat pūrvanimittam. mā bhaiṣīs tvaṁ, mahārāja, na tavetonidānaṁ rājyāc cyutir bhaviṣyati jīvitāntarāyo vā.

† 校訂本は deśayanti śrāddhānāṁ であるが、岩本博士が参照された諸写本の中でも古い伝本の所伝を伝えているという写本B（cf. 岩本 [1979]pp.5-9）には”śrāvakāḥ aśrāddhānāṁ brāhmaṇagṛa(*sic.read* -gṛha)patīnāṁ dharma[ṁ] deśayati(*sic.read* deśayanti).” の異読が見られるという（岩本 [1968]S.79.6-7)。意味の上からも deśayanty aśrāddhānāṁ と訂正して読むのが妥当と考えた。なお次註参照。

[16]第二夢についてはその内容に不明な点があり、ＳｕＡチベット訳（岩本 [1968]S.127.16-20）or do.[1979]

2011 copyright インド哲学研究会

(3) あなたが“一升の真珠が一升の小麦粉と交換される”夢を見られたのは、その同じ〔シャーキャムニ如来〕の声聞たちが一升の小麦粉〔を得る〕ために〔五〕根・〔五〕力・〔七〕菩提分を公開するであろう、という、このことの予兆なのです。

(4) あなたが“白檀がふつうの木材の値段で売買される”夢を見られたのは、その同じ〔シャーキャムニ如来〕の声聞たちがかの異教徒たちの言葉を受け入れ、正法[17] と同等のものとみなすであろう、という、このことの予兆なのです。

(5) あなたが“発情期の象が子象たちによっておびえさせられる”夢を見られたのは、その同じ〔シャーキャムニ如来〕の放逸な声聞たちが戒を身につけた比丘達を追い出すであろう、という、このことの予兆なのです。

(6) あなたが“花と果実が咲き実った庭園が盗賊たちによって奪われる”夢を見られたのは、その同じ〔シャーキャムニ如来〕の声聞たちが聖なる教団に贈与された僧伽藍を住居とした後、まだ身体を修練しておらず、まだ心を修練しておらず、まだ智慧を修練していないある者たちが花や果実を教団から奪い去り、親族たちに与えるであろう、という、このことの予兆なのです。

(7) あなたが“汚物にまみれた一匹の猿が他の〔猿〕たちに〔汚物を〕塗り付ける”夢を見られたのは、その同じ〔シャーキャムニ如来〕の、まだ身体を修練しておらず、まだ心を修練しておらず、まだ智慧を修練してい

附録 III § 91) および漢訳 (T.2,p.853b;cf. 岩本 [1979]p.127) も以下のようにそれぞれに異なる。

rgyal po chen po, khyod kyis skom pa'i phyi nas khron pa snyegs par rmi lam du mthong ba, gang yin pa de ni de rnams gtsug lag khang gi nang na lhan cig gnas pa rnams la chos ston par 'gyur yang, de rnams nyan par 'dod par mi byed cing, yid la mi 'jog ste, de'i snga ltas ni 'di yin no.(大王よ、あなたが渇いた者の後から井戸が追いかける夢を見られたのは、彼らは僧院の中で同居する者たちに法を説くであろうが、彼らは聞こうとせず、〔法を〕心に留めない、〔という〕そのことの予兆がこれなのです。)

如王所夢有一渇人井隨其後。是人寧忍於渇終不取飲者。是彼遺法中有諸苾芻。爲婆羅門長者居士説佛經典。彼婆羅門等心生厭捨不樂聴受。(王が夢みし所の、一渇人ありて井の其の後に随い、是の人は寧ろ渇を忍びて終いに飲を取らざるが如きは、是れ彼の遺法中に諸苾芻ありて、婆羅門・長者居士の為に佛の経典を説くも、彼の婆羅門等は心に厭捨を生じ聴受を楽わざるなり。)

これら梵蔵漢のいづれにしても、夢の内容とその解釈とがどのように関連するのかが判然としない。ところで山口・舟橋 [1955]p.120 註 (4) にはＡＫＶｙに引用された第二夢における「渇いた者 (tṛṣita)」をそのチベット語訳 (skom pa med pa) にしたがって「渇いていない者 (atṛṣita)」と訂正して読むプーサン氏の説が紹介され、本庄 [1991]p.90 訳注 1) はこの訂正を支持している。たしかにこの説にしたがえば、夢における「渇いていない者」が解釈における「信仰心のない長者」に、「井戸」が「声聞たち」にそれぞれうまく対応することになる。しかし上に見たようにＳｕＡの梵蔵漢 (特に漢訳を見よ) を見る限りではテキストを「渇いていない者 (atṛṣitasya)」と訂正することは容易ではない。ここでは意味内容に不明な点を残しつつも、あえてこの訂正を採用しないままに読解した。

[17] ＳｕＡチベット訳、ＡＫＶｙ、ＡＫＵｐは「正法 (saddharma)」の代わりに「仏語 (sangs rgyas kyi bka',buddhavacana)」の語を用いる。

2011 copyright インド哲学研究会

ない声聞たちはみずからも罪に陥り、また信仰ある比丘達に〔不実の〕罪をかぶせるであろう、という、このことの予兆なのです。

(8) あなたが“猿の灌頂が〔行われる〕”夢を見られたのは、その時器官に欠陥のある者たちでさえ王になるであろう、という、このことの予兆なのです[18]。

(9) あなたが“〔一枚の〕布が十八人の人々によって引っ張られるが裂けない”夢を見られたのは、かの完全な涅槃に入られた〔シャーキャムニ如来〕の教えが十八の部分に分裂するであろうが、しかし解脱の布を引き裂くことは出来ない、という、このことの予兆なのです。

(10) あなたが“大群衆が一ヶ所に集まって、言い争い口論し論争し対立することによって過ごす”夢を見られたのは、その〔シャーキャムニ如来〕の教えにおいて、放逸な比丘達が言い争い口論し対立し論争することによって〔その教えを〕隠没させてしまうであろう、という、このことの予兆なのです。

大王よ、あなたは恐れなくともよいのです。その因縁であなたが王位から転落したり命に支障があることはありません。

先のＴＪの引用がこの十夢からなる予知夢譚の一部、第九夢の箇所であったことがわかるであろう。その予知夢譚の全体は、シャーキャムニ仏亡き後の仏教教団 (Saṅgha) の混乱を予言するものである。つまり、シャーキャムニ滅後に在家者・出家者双方ともに仏教徒としての質が低下すること、とりわけ出家者に関しては破戒の比丘たちが持戒の比丘たちを僧院から追い出し、ないし部派が十八にまで分裂し、以後も出家の比丘達の間で争論が絶えず、ついには正法が衰滅することが、クリキン王の夢を通し

[18]他の夢がシャーキャムニ教団に関する予言であるのに、この第八夢のみが俗世の王権に関する予言であるのが不自然である。岩本 [1979]p.75 は写本Ｂに次の異読のあることを示す。

tasyaiva śrāvakā duḥśīlabhikṣo* mahājanena pūjayiṣyanti satkariṣyanti modayiṣyanti.(*岩本博士によって-bhikṣum と訂正される)

その〔シャーキャムニ如来〕の声聞たちは、大衆とともに、破戒の比丘を供養し、あがめ尊び、喜ぶであろう〔、という、このことの予兆なのです〕。

ＳｕＡ漢訳も教団に関する予言としている (T.2,p.853c)。

如王所夢有一獼猴於一處坐。有衆獼猴爲作灌頂者。是彼遺法中不修勝行無德苾芻。衆共成立爲僧中上首。統攝有德修勝行者。

このように第八夢については俗世の王権に関する予言とするものと仏教教団に関する予言とするものとの二つの伝承が見られるが、ＡＫＶｙ (p.278.24-26) の伝える第八夢には両方の伝承が説かれている。

aśuci-mrakṣita-markaṭa-svapnena tac-chrāvakā eva sāmantikābhiṣekaṁ vihāreṣu kariṣyanti. loke 'pi ca paṇḍakā abhirājyaṁ kārayiṣyantīty etad darśayati.

猿の灌頂の夢によっては、その同じ〔シャーキャムニ如来〕の声聞達は僧院において准灌頂を行うであろうし、また世間においても宦官たちが主権を行使するであろう、というこのことを示す。

2011 copyright インド哲学研究会

てカーシャパ如来という権威によって予言されるのである。これは過去仏による予言の物語に過ぎないが、創作された当時の読者にとってはまさしく過去から同時代以降についての予言であったはずであるから、そこになんらかの真実性がなければ予言物語として成立しない類のものである。いいかえると、この予知夢譚の作者は、教団が分裂し部派が互いに論争しあう状況に至るまでの仏滅後の仏教教団史を、すべてが史実である必要はないにせよ、少なくとも読者達の間で伝承されてきた仏教教団史に合致する形で (あるいはその伝承をより正当化するために) この予知夢譚を構成したはずである。この予知夢譚が、それを伝承する者たちにとっては仏教教団の歴史に関するある種の権威としての性格を帯びたものであったことは想像に難くない。

この予知夢譚が史実を無視できない性格のものであるということは逆に言えばその内容から創作年代を推定することが出来るということであるが、岩本博士は十八部へ分派を説く第九夢にもとづいてこの物語の成立年代を部派分裂が終わった西暦150年以降と推定される[19]。また創作者については、この予知夢譚が『倶舎論』の中に出てくることなどから「説一切有部の中で成立したことは明らかである」とされる[20]が、この点は後にふれるように根本説一切有部の律に関する論書 Prabhāvatīの中にもこの逸話の一部分が依用されていることからも補強される。なお、ターラナータ (Tāranātha,16 − 17 世紀) の『インド仏教史』には、説一切有部の比丘聖パールシュヴァ(Pārśva, 脇尊者) が、「ある多聞の上座から『カーンチャナマーラー・アヴァダーナ』というクリキン王の夢の予言に関する経等の得がたい諸経典を〔得て〕読誦し」[21]、それを聞いたカニシカ王 (Kaniṣka,2 世紀) がカシミールにおいて第三結集を行わせたという伝説が記されている[22]。このチベットに伝わる伝説も、博士によるクリキン王の予知夢譚が成立した年代とその所属部派に関する推定と矛盾するものではない。

これらのことから、ＴＪがその大乗仏説論において言及したクリキン王の予知夢譚とは紀元２世紀頃に説一切有部において成立したものの一部分であることが推定される。つまりＴＪは説一切有部からの大乗非仏説の非難に対して自らの大乗仏説論を展開していたのである。それではＳＡＶＢｈの言及する七種の夢からなるというクリキン王の予知夢譚はＴＪと同様に説一切有部所伝のものとみなしてよいものだろうか。

---

[19] 岩本 [1979]p.263.

[20] ibid.p.263.

[21] “ des(='phags pa rtsibs logs) gnas brtan mang du thos pa 'ga' las gser 'phreng can gyi rtogs brjod ces bya ba rgyal po kri ki'i rmi lam lung bstan pa'i mdo la sogs pa mdo shin tu dkon pa dag kyang 'don par byed do /”(Tāranātha,p.47.15-17. c f. 寺本 [1928] 『ターラナータ印度佛教史』(rep. 国書刊行会,1974),p.99)

[22] この伝説は 1747 年編纂のチベットの歴史書『パクサムジョンサン史』(PSJZ,p.83.1-3; 寺本 [1928]p.404) にも記される。因みに、カニシカ王がクリキン王の予知夢譚を聞いて第三結集を決意したというのは、十八部派に分裂した後になお争論が絶えずやがて仏の教説が隠没するだろうという第十夢の予言を聞いてということであろう。

2011 copyright インド哲学研究会

これについてはいささか考察を必要とする。というのも、岩本博士が指摘されるように[23]、現存の仏典資料には上述の説一切有部成立の十夢からなるクリキン王の予知夢譚のほかに、十一夢からなる予知夢譚が『彌沙塞部和醯五分律』にあることが知られているからである。この化地部 (Mahīśāsaka) の律に説かれる予知夢譚は、クリキン王がカーシャパ仏に夢の内容を問うに至るまでの文脈はＳｕＡとよく一致するものの、夢の内容についてはＳｕＡと全く異なったものとなっている。以下、カーシャパ仏が王の見た十一の夢を解釈する部分について、漢訳とそれの試訳を提示してみよう[24]。

佛言。「此十一夢乃爲當來不爲今也。(1) 夢見小樹生華者。於當來世有佛。出於百歳人中。名釋迦牟尼如來應供等正覺。爾時人年三 (＝二) 十便已頭白。(2) 夢見華即成果者。爾時二十歳人便已生児。(3) 夢見犢子耕大牛住視者。爾時人児領家事父母不得自在。(4) 夢見三釜竝煮飯兩邊釜飯各跳相入。不堕中央釜者。爾時富者更相惠施而貧者不得。(5) 夢見駱駝兩頭食草者。爾時王有群臣既食王祿復取民物。(6) 夢見馬母反飲駒乳者。爾時母嫁女已反従求食。(7) 夢見金鉢於空中行者。爾時雨不時節亦不周普。(8) 夢見野狐尿金鉢中者。爾時人民唯富是婚不擇本姓。(9) 夢見獼猴座金床上者。爾時國王用非法治政暴虐無道。(10) 夢見牛頭栴檀賣與腐草同價者。爾時釋種沙門貪利養故與白衣説法。(11) 夢見水中央濁四邊清淨者。爾時佛法中國先滅邊國反盛。」佛言。「王十一夢所爲如此。於大王身無有不祥。」

〔カーシャパ〕仏はおっしゃられた。「〔王が見られた〕この十一の夢は今〔の王ご自身〕に関するものではなく、未来に関するものです。〔すなわちあなたが〕

(1) 夢において小さい樹に華が咲いたのを見られたのは、未来の世、人間の寿命が百歳の時にシャーキャムニと称する如来・応供・等覚〔者〕が出られるであろう。その時人は齢三十にしてすでに頭が白いであろう〔ということの予兆なのです〕。

(2)〔またあなたが〕夢において華がただちに果実となるのを見られたのは、その時人はすでに二十歳で子供を産むであろう〔ということの予兆なのです〕。

(3)〔またあなたが〕夢において子牛が〔農地を〕耕して成牛はそれを住視しているのを見られたのは、その時には人の子供が家事をとりしきり、父母は〔家事に関して〕自在をえられないであろう〔ということの予兆なのです〕。

[23] 岩本 [1968]SS.219ff.,do.[1979]pp.236ff.
[24] 岩本 [1979]pp.250-251. 漢訳原文は T.22,p.172c.

2011 copyright インド哲学研究会

(4)〔またあなたは〕夢において並んだ三つの釜でご飯を煮ていると両辺の釜の米が跳んで互いの釜の中に入るけれども、真ん中の釜には〔米が〕堕ちないないのを見られたが、それは、その時、富める者は互いに施し合うけれども貧しい者は〔施しを〕得られない〔ということの予兆なのです〕。

(5)〔またあなたが〕夢において双頭のラクダが草を食らうのを見られたのは、その時、王の群臣は、王から俸給を得ながらさらに民衆の物を搾取するであろう〔ということの予兆なのです〕。

(6)〔またあなたが〕夢において母馬が子馬の乳を飲むのを見られたのは、その時の母は娘を嫁がせた後、かえって〔娘から〕食をもとめるであろう〔ということの予兆なのです〕。

(7)〔またあなたが〕夢において金の鉢が空中に跳ぶのを見られたのは、その時、雨は時期はずれに〔降り〕、またあまねくゆきわたらないであろう〔ということの予兆なのです〕。

(8)〔またあなたが〕夢において野狐が金の鉢の中に尿するのを見られたのは、その時の人民は、ただ金持ちと結婚して氏素性を省みないであろう〔ということの予兆なのです〕。

(9)〔またあなたが〕猿が金の床の上に座っているのを見られたのは、その時の国王は非法をもって政を治めて暴虐無道であるだろう〔ということの予兆なのです〕。

(10)〔またあなたが〕夢に牛頭栴檀 (goś̄īrṣa-candana)[25] を腐った草と同価で売るのを見られたのは、その時の釈種沙門は利養をむさぼり、在俗の人に法を説くであろう〔ということの予兆なのです〕。

(11)〔またあなたが〕夢において水の中央が濁っているのに四辺は清らかであるのを見られたのは、その時、仏法は中央の国において衰滅するけれども辺地の諸国ではかえって盛栄するであろう〔ということの予兆なのです〕。」

〔カーシャパ〕仏はおっしゃられた。「王の十一の夢の為す所は以上のとうりであり、大王の御身によくないことが起こる〔ことの予兆な〕のではありません」と。

[25] 中村元編著 [1986]『仏教植物散策』東書選書 101,p.137 によれば、牛頭栴檀 (goś̄īrṣa-candana) とは「ビャクダンの別名か、または産地の山の名を付したものだろうと考えられている」。

2011 copyright インド哲学研究会

化地部の『五分律』が伝えるクリキン王の十一夢の物語は、このようにシャーキャムニ如来の時代に俗世が混乱するありさまを主に予言したものであり、仏教の未来に関するものはわずかに (10)(11) に見られるのみである。これは、ＳＡＶＢｈの言及する予知夢譚と比較して夢の数が異なることはもとより、内容的にも「聖教混乱の原因」について説いたものと言えるものではない。大乗仏説論の文脈でこのような俗世の混乱に関する物語に言及することに意味はないであろう。ＳＡＶＢｈの言及するクリキン王の七夢からなる予知夢譚が化地部所伝のものではないことは明らかである。

しかしこのようにクリキン王の予知夢譚が説一切有部と化地部の二つの部派に伝承されていることが知られる以上、それら以外の部派によって伝えられた未知のクリキン王の予知夢譚があった可能性はもちろん否定できない。とはいえ、ＳＡＶＢｈの言及するクリキン王の予知夢譚については、幾つかの理由によってその可能性を考慮する必要はなく、説一切有部所伝のものと推定してもよいと考えられる。その理由は、第一に、『大乗荘厳経論』の大乗仏説論の他の箇所で説一切有部を対論者として想定している言説が見られること[26]。第二にＳｕＡやＡＫＶｙなどが伝える説一切有部所伝の十夢の系統が「聖教混乱の原因」について予言したものといえる内容のものであること。第三にはこの説一切有部所伝の予知夢譚が仏説論と強く結びついていること。第四には、上述のように大乗仏説論に関してＳＡＶＢｈと共通の論点を扱うＴＪが説一切有部所伝の予知夢譚を引用していることである。これらのうち、第二、第三の理由については次章で詳しく述べるであろう。

ただ問題として残るのは、ＳＡＶＢｈの言及するクリキン王の予知夢譚が七種の夢からなるとする点である。実は、『婆沙論』には「毘奈耶に、訖栗鶏王の一夜中に於

---

[26]『大乗荘厳経論』が大乗非仏説論者としてとりわけ説一切有部を想定しているとみなしうる例を二点挙げておく。

1. 『大乗荘厳経論』には対論者たる大乗非仏説論者が「仏語の規定 (buddhavacanasya lakṣaṇam)」として引き合いに出す「経に入り、律に見られ、法性に違わない (sūtre 'vatarati vinaye saṁdṛśyate dharmatāṁ ca na vilomayati)」という語句が見られる (MSA,p.4.25-26)。これはもともと『大般涅槃経』に見られる経句であるが、「法性に違わない (dharmatām na vilomayati)」の部分はパーリの伝承には見られず、説一切有部における付加であることが学者によって指摘されている (本庄 [1989]「阿毘達磨仏説論と大乗仏説論」『印度学仏教学研究』38-1,p.410)。
2. ＭＳＡ,I.k.11 に対するＳＡＶＢｈには、上の仏語の規定が小乗部派の典籍においても必ずしも適合しないことを指摘することによって小乗部派の典籍のみが仏説であるとはいえないことを指摘する部分があるが、そこに以下のような特に説一切有部との対論が見られる。

> あるいはまた、もし〔説一切有部の声聞たちが〕「〔確かに各部派の間には相互に何が仏説であるかについて異論が存在するかもしれない。しかし〕説一切有部の典籍の中では自らの諸経は〔説一切有部の〕内部で相互に合致するし、諸々の律も内部で合致するし、法性も内部で違わない。〔したがって説一切有部の典籍は〕仏説である」というならば、〔我々も同様に〕言おう。自らの〔経〕に入っているから、自らを調伏することにあらわれるから、また広大性と甚深性を持つから法性と全く違わない(第１１偈) と。(ＳＡＶＢｈ,D.Mi 23a2-3;P.Mi 24b1-2; 拙稿 [1993]p.72.14-20)

2011 copyright インド哲学研究会

いて十四の夢を作すことを説く」[27] という記述があり 、説一切有部の伝えるクリキン王の予知夢譚が十夢の系統ばかりでなかったことが知られるのである。(ただしこの場合についていえば、ＳＡＶＢｈチベット訳の「七種の夢」という記述が誤りである可能性についても考えておく必要があるように思われる。)

4

ＳＡＶＢｈおよびＴＪがそれぞれの大乗仏説論を展開する中で言及するクリキン王の予知夢譚が、シャーキャムニ滅後の仏教教団の混乱を説き、ないし十八部派への分裂という正法の危機を予言するような説一切有部所伝のものと考えられることを述べた。しかしなぜこのようなクリキン王の予知夢譚がそれぞれの大乗仏説論において問題となっているのであろうか。

まず検討しなければならないのはＴＪの文脈である。ＴＪが説一切有部所伝の予知夢譚を引用するのは、対論者つまり説一切有部の大乗非仏説論の典拠としてであり、仏教教団が十八部派に分裂することを予言する部分であった。ＴＪのみから読みとれる説一切有部の主張は、「世尊カーシャパはクリキン王の夢にもとづいてシャーキャムニ滅後に教団が十八部派に分裂することまでは予言されたが、大乗については言及されていない。それは大乗がシャーキャムニの教えでないからである」というものである。上述の通り、クリキン王の十夢からなる予知夢譚は、カーシャパ如来による予言というかたちで権威づけられた、説一切有部において伝承されてきた十八部派分裂前後までの教団史と見なしうるものである。そこに大乗が説かれていないというのは、大乗がシャーキャムニ直系の教説を継承するものでないことの証明であるという説一切有部の批判はひとまず理解することが出来よう。

このＴＪから窺われる説一切有部の主張を裏付ける資料に、シャーキャプラバ (Śākyaprabha) の『聖根本説一切有部沙彌頌註具光 (Prabhāvatī)』がある[28] 。これは根本説一切有部の律に関する論書であるが、その最終部分に根本説一切有部の仏説論を展開していることによって有名であったらしい。ここに説かれる仏説論の詳細については別稿を予定しているが、論旨は、諸部派の根本たることを自認する説一切有部[29] の内部にあ

[27] T.27,p.193b12-13. cf. 岩本 [1968]S.248,do[1979]p.263.

[28] この資料の存在を知ることが出来たのはプトゥン (Bu ston,1290-1364) の『仏教史 (Chos 'byung)』のオーバーミラーによる英訳 (E.Obermiller[1932] History of Buddhism(Chos 'byung) by Bu ston,II.Part;The History of Buddhism in India and Tibet,Heidelberg,pp.97-98) のおかげである。なお、博覧強記のプトゥンの同著書には少なくとも他にもう一ヶ所クリキン王の予知夢譚を引用する部分がある (Obermiller[1932],p.102.21-28;Bu ston's Chos 'byung,p.813(fol.91a2-4)。そこには「『倶舎経註 (Kośa-sūtraṭīkā)』の〔引用する〕『カーンチャナマーラー・アヴァダーナ』(mDzod kyi mdo ṭīka tu gser phreng can gyi rtogs pa brjod pa)」からとして、クリキン王の十夢中の第十夢の解釈部分が引用される。『倶舎経註』とはシャマタデーヴァの『アビダルマコーシャ・ウパーイカー』(ＡＫＵｐ,P.Tu 147b3-4) である。

[29] ここで説一切有部と根本説一切有部の関係について立ち入ることは筆者の能力を超えている (cf. 平川

2011 copyright インド哲学研究会

る「説一切有部以外の十七部派は仏説ではない」という主張をしりぞけることにある。すなわち、根本説一切有部の論師シャーキャプラバは自派内にある「説一切有部こそが唯一の仏説である」という偏狭な意見に対して「十八部派すべてが仏説である」ことを論じ、その締めくくりに次のようにクリキン王の十夢からなる予知夢譚の第九夢に相当する部分を経証として引用するのである[30]。

> 『クリキン王夢醒経』に、「カーシャパ正等覚者はクリキン王に告げられた。『大王よ、あなたは十八人の人々によって一枚の布が引っ張られる夢を見られたが、それはシャーキャムニの教えが十八に分裂するであろうが、その解脱の布は引き裂かれないであろう〔ということの予兆なのです〕』」と出ているから、それら〔十七部派の教え〕も仏語たるものとして矛盾はないのである。

シャーキャプラバの年代その他については浅学にしてよく知らないが、グナプラバ(Guṇaprabha, 徳光)より後代の彼がバーヴァヴィヴェーカやスティラマティ(A.D.510-570)以降の人であることは確かなようである[31]。しかしPrabhāvatīが比較的後代の資料であるにせよ、根本説一切有部に属する人によってクリキン王の予知夢譚が仏説論の権威と見なされていることが知られたことは貴重である。ここに見られる、「十八部派に収まる教説が仏説であることはクリキン王の予知夢譚によって保証される」という論理が、十八部派に属さぬ大乗は仏説ではないという論理に容易に転換しうることは、誰の眼にも明らかであろう。ＴＪに引かれたクリキン王の予知夢譚を論拠とする大乗非仏説論は、説一切有部において実際に唱えられていたものに違いない。説一切有部からすれば、仏語にあらざる異教徒の思想が入り込み(十夢中の第四夢を参

彰『インド仏教史上巻』春秋社,1974,pp.167-168、榎本文雄「東トルキスタン出土梵文阿含の系譜」『華頂短期大学研究紀要』29,1984,p.11 など)。ただしシャーキャプラバは「説一切有部は諸部派の根本であるから根本説一切有部という」と言って、説一切有部と根本説一切有部とを特別に区別することはない。したがってここでは根本説一切有部＝説一切有部というシャーキャプラバの理解にしたがっておく。

[30]Prabhāvatī,D.Shu 164a1-3;P.Hu 183b7-184a1:

> rgyal po kri kī'i(1) rmi lam sad pa'i mdo las / yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'od srungs gyis(2) rgyal po kri kī(3) la bka' stsal pa / rgyal po chen po khyod kyi rmi lam du mi bco brgyad kyis ras yug gcig 'dren par mthong(4) ba de ni shā kya thub pa'i bstan pa rnam pa bco brgyad du gyes par 'gyur la / de'i rnam par grol ba'i ras ni gyes par mi 'gyur ro // zhes 'byung ba yin pa'i(5) phyir de dag kyang sangs rgyas nyid(6) kyi gsung nyid du mi 'gal lo //
>
> (1)P.ki'i. (2)P.gis. (3)P.ki. (4)P.mthung. (5)P.no'i. (6)P.*om.* nyid.
>
> また、また上述のようにこの文章はプトゥンの『仏教史』にも引用される(Obermiller[1932]p.98.22-30;Bu ston's Chos 'byung,p.810(fol.89b2-3);cf. 寺本[1928]p.401)。概ねPrabhāvatīと一致するが、経典名を『クリキン王夢解釈経(rgyal po kri kri'i rmi lam *bshad* pa'i mdo)』としている点が目に付く。

[31]Cf. 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著 [1990]『梵語仏典の研究　論書編』平楽寺書店,p.372(f.n.329) またシャーキャプラバに関するチベットの伝承については、Obermiller[1932]p.161、寺本[1928]p.284(Tāranātha,p.162.5)を参照。

2011 copyright インド哲学研究会

照)、十八部派に分裂しながらも守られてきた教団の歴史を顧みずに突如として出現し、あまつさえ部派仏教を小乗として非難する大乗を仏教から排除しようとするのは当然のことと言わねばならない。

さて、ＳＡＶＢｈのケースであるが、この場合はかなり屈折した表現をしているものと考えられる。大乗とは正法を害するために仏滅後に捏造されたものだという説一切有部からの非難に対してＳＡＶＢｈがクリキン王の予知夢譚に言及するとき、この予知夢譚が説一切有部によって大乗非仏説論の論拠として利用されていることをＳＡＶＢｈが知らなかったとは考えられない。そのことを知りながらＳＡＶＢｈがこの予知夢譚に言及しているとすれば、そこには皮肉を交えた反論が意図されていると見るべきである。つまり、ＳＡＶＢｈによればこの予知夢譚はシャーキャムニ教団が部派分裂し衰退するまでの「聖教混乱の原因」を予言するものであり、声聞たちこそがシャーキャムニの聖教を混乱させるであろうことを予言したものである。そういった仏教の危機に関する予言に大乗についての言及がないというのは、むしろ、説一切有部の意に反して大乗が聖教を混乱させる原因ではないことをこの予知夢譚は保証していることになろう。

5

『大乗荘厳経論頌』が大乗が仏説であることの理由として第一に挙げた「初めに予言されていないから〔大乗は仏説である〕」という主張は、ＳＡＶＢｈに依って理解するならば、クリキン王の予知夢譚を論拠とする「十八部派だけが仏説であり、それに収まらない大乗は仏説ではない」という説一切有部の主張を明らかに意識したものであり、おそらくはそれを逆手に取ったものであることが推測された(。逆に言えば、『大乗荘厳経論』が大乗仏説論を展開する上で説一切有部所伝以外の仏説論に関連しないクリキン王の予知夢譚に言及しても意味がないのである)。このことは『大乗荘厳経論』が一般的かつ普遍的な大乗仏説論を構築するよりも前に、なによりも説一切有部の大乗非仏説論に対して答弁することを要請させられていた情況を窺わせる。この点は単に『大乗荘厳経論』の大乗仏説論の内容を理解する上だけではなく、大乗に対する説一切有部からの誹謗を常に意識しつつ成立発展していったであろう瑜伽行派という大乗学派の成立背景や事情を理解する上でも重要視されねばならない。すでに別のところで論じたことの繰り返しになるが、瑜伽行派が『般若経』の「一切法は無自性である」という経文を三無性によって再解釈するにいたった経緯については、「一切法が無自性であるというのは仏説ではなく魔の所説である」という説一切有部からの誹謗を抜きにしては理解しえないと考えられるのである[32]。

[32]Cf. 拙稿 [1996]pp.11-28.

2011 copyright インド哲学研究会

それにしても、説一切有部においてクリキン王の予知夢譚が創作された事情を考えると興味深いものがある。前に述べたようにクリキン王の十夢からなる予知夢譚はシャーキャムニ滅後教団の荒廃の様子を予知夢譚という形で記述するものであるが、そこには説一切有部の教団史観が色濃く反映されているはずである。異教徒の思想が教団に入り込み正法・仏語とみなされたこと、あるいは悪しき声聞たちが具戒の比丘達を追い出すなど教団を乱し、ないし十八部派に分裂することを語りながら、一方では「解脱の布」は引き裂かれないとも述べているのはなぜであろう。これがＴＪやPrabhāvatīの解釈するように、十八部派が仏語であることを承認することを意味するとすれば、一体なぜ説一切有部は仏語ではない異教徒の思想が混入した経説を、あるいは教団を乱した悪しき声聞たちを認めるような屈辱的な判定を下したのであろうか。説一切有部は『大毘婆沙論』において自説に合わない大衆部や分別論者等の説を「三蔵に入らないから仏説ではない」と退けながら、しかもその同じ理屈によって自派の三蔵のみが仏説であることが言えなくなるというジレンマに陥いると「法性」や「経の隠没」や「密意趣」という弁明の理論を展開しているという[33]。しかも「法性」や「経の隠没」や「密意趣」の理論は説一切有部以外の部派の三蔵が仏説であることをも正当化する理論となりうることは、大乗がこの理論を利用して大乗仏説論を展開していること[34]からも容易に見て取ることができる。結局、説一切有部は自らの三蔵が仏説であることを主張するために他の十七部派の三蔵も仏説として認めなければならなかったのだろうか。あるいは、そこに部派仏教を批判する新興の勢力としての大乗が外圧として機能し、「十八部派皆仏説」という見解を促したということはありえないだろうか。もしそうであるとすれば、説一切有部所伝のクリキン王の予知夢譚はその創作当初から大乗の存在を意識したものであったことになろう。

いずれにせよ、説一切有部所伝のクリキン王の予知夢譚には部派相互の間で争われた仏説論に関する一種の裁定が織り込まれているのであり、またそれが説一切有部における仏説論の一つの権威であったからこそ、『大乗荘厳経論』やＴＪはこの予知夢譚に言及しなければならなかったのであろう。

【略号表】

AKBh Abhidharmakośabhāṣya,ed.P.Pradhan,Patna 1975(2nd.ed.)
AKLA Abhidharmakośaṭīkālakṣaṇānusāriṇīnāma,Otani No.5594
AKTA Abhidharmakośabhāṣyaṭīkātattvārthanāma,Otani No.5875
AKUp Abhidharmakośopāyikānāmaṭīkā,Otani No.5595
AKVy Abhidharmakośavyākhyā,ed.U.Wogihara,Tokyo 1936

[33]Cf. 宮本 [1934],pp.99-127、高崎 [1985],pp.24-25、本庄 [1989],pp.410-409.
[34]本庄上掲論文参照。

2011 copyright インド哲学研究会

Bu ston's Chos 'byun bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod ces bya ba, The Collected Works of Bu-ston,Part 24(YA),ed. L.Chandra,Śata-Piṭaka Series vol.64,New Delhi 1971

D Derge edition of Tibetan Tripiṭaka

MSA Mahāyānasūtrālaṁkāra,ed.S.Levi,Paris 1907

MSAT Mahāyānasūtrālaṁkāraṭīkā,Tohoku No.4029;Otani No.5530

P Peking edition of Tibetan Tripiṭaka

Prabhāvatī Āryamūlasarvāstivādaśrāmaṇerakārikāvṛttiprabhāvatī, Tohoku No.4125;Otani No.5627

PSJZ Pag Sam Jon Zang,ed.C.Das,Calcutta 1908(rep.Kyoto 1984)

SuA Sumāgadhāvadāna,ed.Y.Iwamoto,Kyoto 1968/Kyoto 1979

SAVBh Sūtrālaṁkāravṛttibhāṣya,Tohoku No.4034;Otani No.5531

T 大正新修大蔵経

Tāranātha TĀRANĀTHAE DE DOCTRINAE BUDDHICAE IN INDIA PROPAGATIONE,ed.A.Schiefner,1868(復刊 Tokyo 1963)

TJ Madhyamakahṛdayavṛttitarkajvālā,Tohoku No.3856, Otani No.5256

キーワード 『大乗荘厳経論』, 大乗仏説論, スマーガダーヴァダーナ